

サン＝シランのカテキズム 『平俗神学』の成立と論争をめぐって

水 野 豊*

Le catéchisme de Saint-Cyran
sur l'origine et la controverse de 《la Théologie familière》

Yutaka MIZUNO*

はじめに

フランス・ジャンセニズムの指導者、サン＝シラン修道院長こと、ジャン・デュヴェルジエ・ド・オランヌは、青年時代に知り合ったオランダの神学者、コルネリウス・ジャンセニウスと共にアウグスティヌスの研究に打ち込んだ。ジャンセニウスの方は、聖書学教授となり、ルーヴァンで彼の集大成ともいえる『アウグスティヌス』を書き上げるとまもなく死んだ。デュヴェルジエは、ポワチエ司教、ラ・ロシュポゼに師事し、ブレンヌのサン＝シラン修道院を任され、院長となった。その後、アルノー家の長男、アルノー・ダンディーやフランス・オラトリオ会創設者、ピエール・ド・ベリュールと知り合い、後者からは大きな思想的影響を受けた。アルノー家の人物と知己となったことは、のちにポール・ロワイヤル女子修道院の霊的指導者となり、大貴族や法服貴族階級に多大な影響力をもつことに繋がった。時の宰相リシュリューから危険人物として逮捕され、ヴァンセンヌ城に留置されてからは、彼の指導下で回心した“隠士”たち、特にアルノー家の末弟アントワーヌ・アルノーを後継者と認めた。ジャンセニウスを理論家、学究肌タイプとすれば、サン＝シランは実践家、個別具体的に人々を指導する人であった。¹⁾

イエズス会の学校を出たサン＝シランは、初期の著作活動においてジェズイットの傾向が見られるとされるが、フランス・オラトリオ会の創立者、P.ベリュールと親交を結ぶようになってからは、イエズス会と対立することになる。ベリュールの著書『イエスの偉大さについて』Des grandeurs de Jésusがイエズス会の神父ガラスに批判されると、サン＝シランがこの神父の作品を攻撃する。師ベリュールの死後も、ペトルス・アウレリウスPetrus Aureliusの変名でイエズス会のモリナ主義を批判しつづけた。

この論考はサン＝シランが偶然頼まれて子供の教育用のカテキズム『平俗神学』を書いたこと

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

から、この著作が思いもよらぬ運命をたどりながら、アントワーヌ・アルノーを始めとする弟子たちが師の思いを継承して、作品を擁護すると共に教育実践に利用していく様子を考察する。

子供の教育への関心

ポール＝ロワイヤル女子修道院で修道女らの指導を引き受け、アルノー家に繋がる青年たちが彼の下で回心し始める1637年、サン＝シランは知人の息子たちのため自作のカテキズムを著した。のちに『平俗神学』*Théologie familière* と呼ばれる教理問答書である。彼の弟子たち（ポール＝ロワイヤルの隠士たち）の証言によれば、司法官*avocat général*、ジェロム・ビニョンの依頼で、数時間で書き上げたとされている。²⁾このころ、サン＝シランは子供の教育に強い関心を抱いており、自分の思想にそった後継の聖職者を養成する「学校」を作ろうとしていたようである。1638年対立化してしまったりシュリユーの命で逮捕されてからは、弟子たちに自分の構想を説明し、預かっていた数人の子供たちも隠士たちに引き取られる。ポール＝ロワイヤルの「小さな学校」の始まりである。ヴァンセンヌ城からの彼自身による手紙³⁾やN.フォンテーヌ著『ポール＝ロワイヤル史のための覚書』のなかの「A.ルメートル氏との対話」部分には、サン＝シランの子供教育への熱意が語られている。以下は前者の手紙の一部である。

「私の心中にある子供たちに対する愛情と重視すべき信仰や恩寵に対する無配慮を如何に私が憂慮するかをあなたに読み取っていただけたと思います。私が教会の神学校のような家を建てる構想を考えたとき、子供たちの無垢を維持しなければ、彼らが良き聖職者となるのは難しいと思いました。私はパリ市内全体で自分が選ぶ六人の子供にしか私の考える教育はできないと思いました。私と出会い、神から祝福されることによって、特に優秀なラテン語教師と子供たちの意識を正しく導くすぐれた聖職者を彼らにつけようと考えました。後者についてはすでに私の手中にあるので、子供たちに言語を教えるに最も適した20才から25才の人物を考えました。しかし、私の牢獄入りでこの構想は崩れてしまいました。⁴⁾」

引用文中の「神学校」と訳した語は *séminaire* であり、ここでは建物のことだと思われる。「全パリで六人を選んだ」というのは、頼まれて引き受けた子供の数であり、積極的に自ら搜したわけではないので、事実と食い違うように思えるが、子供を預かるに際して、その子の素質や聖職に向いているかどうかを観察しているようなので、まんざら嘘をいうつもりはないのだろう。子供につけようとする教師についても、具体的に人物をイメージして語っているように思える。

「ルメートル氏との対話」は、ヴァンセンヌ城から解放されたあと、サン＝シランがポール＝ロワイヤル・ド・パリに来て弟子たちに話をするという形式になっている。このなかで、妻が死産した農夫が助けを求めてくる場面があり、そのあと洗礼を受けずに死んだ子供の話から、子供の教育に対する自分の情熱に話題を移す。サン＝シランは一般の平民の子供でも、その子に聖職者向きの傾向があれば、教育したいと述べ、自分が囚人であった間も、幼い孤児をさがして、

自分の修道院で育てたいと考えていたという。また、ルメートルに預けた子供の消息を尋ね、ルメートルがある子供については多くを語り、別の子については二言三言で終わってしまうと、不満の意を示して、教育することは辛い仕事であるが、神が自分たちに課した苦行であると弟子たちに論じている。⁵⁾

十七世紀のカテキズムとサン＝シランの二作品

カテキズム (catéchisme, カテシスム) とは、ヒュルティエール辞典によれば、「信仰真理を教えるための本、または宣教」であり、トリエント公会議以後「各教区において毎日曜日に司祭はこれを教えるべき」としている。この語はギリシア語 *katechesis*（“教育”の意味）などに由来するという。⁶⁾

カテキズムが重要視されるのはM.ルター以後であり、特にトリエント公会議後、フランスでも司教らによって数多く書かれ、リュソン司教であったリシュリユーも、サン＝シランの助けを借りて自作 (1619) を著している。⁷⁾『近代カテキズムの起源』*Les origines du catéchisme moderne* のなかで、J.-Cl.ドテルはその時期を1541年—1660年と位置づけている。⁸⁾この期間の主要なカテキズム作者として、ヴァンサン・ド・ポール (1567-1660)、アドリアン・ブルドワーズ (1584-1665)、ジャン＝フランソワ・レジス (1597-1640)、マリ・ド・ランカルナシオン (1599-1672)、ジャン・ユデス (1601-1680)、ジュリアン・モノワール (1606-1683)、エミ＝マリ・ブドン (1624-1702)、シャルル・デミア (1637-1689)、をあげ、これにリシュリユー (1585-1642) とサン＝シラン (1581-1643) を加えている。こうした「教理教育の発展は就学化(学校成立)の展開と密接に結び付き、一般に就学化は教理教育の契機ではないにせよ、その手段とみなされる」としている。Ph. アリエスを引用しつつ、彼は「小さな学校」の出現がラテン語による子供たちへの「詩篇集」朗読や「聖歌」習得から少しずつ変化し、フランス語による俗化した教科へ向かうことを指摘している。⁹⁾ドテルは、またサン＝シランの『平俗神学』の内容を概略的に考察し、特に十七世紀の神学的概念として重要な「恩寵」*grâce*の章に注目して、サン＝シランの教義は伝統的なものを分かり易く比較的穏健なことばで代弁しているだけであり、ジャンセニスト的ではないことを強調している。ドテルによれば、ジャンセニズム寄りのカテキズムが登場するのは、1660年以後「三人のアンリ」(アンジェ司教、ラ・ロシェル司教、リュソン司教)の教区カテキズムにおいてであるとしている。¹⁰⁾

ここで、ドテルはどういう理由に基づいてサン＝シランの「恩寵」説明を「ジャンセニストでない教義」と断言するのだろうか。モリナ主義的寛容論を拒否し、アウグスティヌス教義にあくまで忠実であろうしたサン＝シランは、自分の理想とする聖職者養成教育がジェズイット的教育内容では不可能であると考えていた形跡がある。『平俗神学』はたまたま偶然頼まれて書かれたものだが、「恩寵」の部分のみは彼の独自性が活かされていないのだろうか。ドテルが特にこの箇所を「伝統的」*traditionnelle* とか、「ゆるぎない伝統の代表的」*représentative d'une tradition bien établie* 教義とするのは、次世代のジャンセニズムとの意図的区別、あるいは18世紀狂信派

から分離しようとしたためであろうか。それとも、ドテルがその次のパラグラフで述べているマチュー・フェイドー『恩寵のカテキズム』と比較したかったためだろうか。このカテキズムは1650年に出版され、パリ大司教やローマから神学者を不安にさせたとして断罪されたという。¹¹⁾

C.ヴィッケネームもまた、その著書『教理教育』La catéchèseのなかで、十七世紀のカテキズム作家を論じ、A.ブルドワーズ司祭が所属小教区において子供たちをクラス別編成で具体的教理教育プログラムを示したことを重視する。1660年以後は教育マニュアルが次々と出版され、なかでも、クロード・フルーリ(1640-1723)を重要と位置づける。フルーリは教理教育に各宗派の独自見解を持ち込むことを批判したが、その意味でルターとサン＝シランのカテキズムが歴史的構造を重んじたことに正当性をみとめている。つまりフルーリもまた『平俗神学』が偏向的教理教育でないかと評価している。¹²⁾ヴィッケネームはこれ以上詳しくサン＝シランのカテキズムに言及していないため、『平俗神学』の内容全体が問題になっているのか、「恩寵」部分のみを論じているのか不明であるが、宗派的要素が薄いことは留意しておいて良いと思われる。

ところで、サン＝シランの『平俗神学』は十七課(初版本は十二課)からなり、各課のタイトルは以下のとおりである。¹³⁾

- ①神について ②世界の創造について ③人間の墮落について ④世界の救済について
- ⑤受肉について ⑥教会について ⑦信仰について ⑧象徴の説明
- ⑨愛徳について ⑩神の戒律について ⑪教会の戒律について ⑫恩寵について
- ⑬祈りについて ⑭秘蹟(洗礼・堅信)について ⑮聖体について
- ⑯悔悛〔告解〕・終油について ⑰叙階・婚姻について

さらに、この書とは別に『小カテキズム』Le petit catéchisme が存在する。J.オルシバルが『ジャンセニスムの起源：Vサン＝シランの霊性』で初めて公にした。¹⁴⁾この作品は『平俗神学』に比べて量的には四分の一程度で、内容も一見易しそうに見受けられる。また、教理問答の形式も『平俗神学』と多少異なり先生が生徒に知識と理解力を尋ねる体裁をとっている。全体が十三課からなり、各課に個別タイトルはついていない。従って、「恩寵」に関しても体系的に説明されておらず、生徒が先生の質問に答える際、必要に応じて(第9課、第13課)使用しているに止まっている。教理内容を提示する順序は『平俗神学』にかなり近いといえるが、全体的に簡素化されている。

『平俗神学』への陰謀とその擁護

サン＝シランの教理問答書『平俗神学』の初版が現れるのは1639年である。ところが、これは作者自身の意志で出版されたのではなかった。1637年にこれを書いたサン＝シランは、翌年リシュリユーの命で逮捕され、ヴァンセンヌ城に閉じ込められた。ベリユールの後継者として、またジャンセニウスの親しい知己として、宗教的な言説でも政治的発言でもことごとくりシュリユーの反対者であったのは事実であるが、リシュリユーに危険な人物と明確に意識させたのは、A.ルメートルを始めとする「隠士」たちの出現であろう。

サン＝シランの最も信頼した弟子、A.アルノーが1652年にイエズス会ブリザシエ神父との論争をまとめた文書（『アルノー著作集』29巻）を元に、『平俗神学』にまつわる事件の顛末を再現してみよう。¹⁵⁾

サン＝シランは親しい知人J. ビニョンに頼まれ、子供の教育用に『平俗神学』を書いた。ビニョンはこの書物のことを数人の学識者に伝えたが、この書の写しを入手したある聖職者がオリジナルに加筆、訂正を加え、サン＝シランの名でこれを出版した(1639)。サン＝シランの友人たちはこの初版本が全く虚偽で改竄されていると感じ、オリジナルに合致する第二版を1642年10月1日付けで五人の博士たちの承認(賛同)を得て出版した。1643年1月始め、ヴァンセンヌ城からサン＝シランが出所する少し前に、この本は公に流布した。イエズス会士たちは近く氏が釈放されることを懸念心配して、パリ大司教会議で秘密裡にこの本に対して陰謀を策し、会議のメンバーだった元イエズス会士のひとりを使って、丁度この会議が権限を有する一般共通オールドナンスの更新時期を利用して、「教書」Mandementに『平俗神学』の使用禁止を挿入した。教書はパリ大司教名で出されるが、当の大司教はこのことを知らなかった。1643年1月27日付けの教書にイエズス会士たちの陰謀があると一早く情報をえたアルノーは、すぐにサン＝シランやその友人たちに知らせ、自らは請願の手紙を準備した。ゲメネ公爵夫人は大司教に事情を話す任務を引き受けた。教書は日曜説教Prôneで公表されるため全教区に送られていた。アルノーが動いたのはこの公表の二日前だったが、パリ大司教もことの成り行きをよく理解して、すぐに最初の教書公表を取り消す第二の教書を出した。

明らかに対立が前提になっている揉め事において、片方の言い分だけを取り上げて、事件の真相を論じるのは危険なことであるが、アルノーが言っていることのなかで、客観的に事実と認められることは、四点あると考えられる。これらをさらに詳しく他の資料も参照しつつ考察してみよう。

- (1)『平俗神学』の初版本はサン＝シランの知らぬ間に出版されたこと。
- (2)著者の友人たちの手で第二版が出版されたこと。
- (3)第二版が何者かの操作で危うく禁書処分にされかかったこと。
- (4)禁書処分はパリ大司教の力で解かれたこと。

第一の「初版本が著者サン＝シランの手で出版されたのでないこと」は今世紀の研究者たちも異論がないようである。筆者がパリ国立図書館で調べたところ、この初版本は二冊所蔵されている(D33399, D33400)。M.C.T.P. de S. Marsによる允許を附し、ジャン・ド・ミル書店から出版されている。「読者へ」というまえがきが入り、本文は12章から成る。J.オルシバルは『ジャンセニスムの起源：V サン＝シランの霊性』で、「A.アルノーのいうことを信じれば」とことわりながら、I.ダモン、A.ルヴァイヤンというふたりの出版賛同者がサン＝シランの知人にいないことを認めている。¹⁶⁾42年版の編集者は「著者の善意が不意打ちされた」と言明している。A.アルノーは「ある聖職者un ecclésiastique」とだけ記していて、人物名や会派名などを特定していない。¹⁷⁾第二の『平俗神学』第二版は1642年10月に五人の博士の賛同と王権の允許を得て、出版された。

J.オルシバルは「五人の博士」を「ポール＝ロワイヤルに好意的な」とだけ形容している。¹⁸⁾これに対して、F.デルフォルジュやJ.ルソルニエは「五人の博士」をB.フェロン、J.ブルジョワ、A.アルノー、M.ボアルネ、J.ギユベールだとしている。¹⁹⁾多くの文献は1642年10月1日という日付を用いているが、これは博士たちの承認と王の出版許可であり、実際に市中に出回るのは43年らしく、1月とする説が最も信頼できそうである。内容的には、A.アルノーは初版本がオリジナルを大幅に改竄したと印象づけるため、全く違うようにいうが、課の区切りや表現の一部変更はあるものの筆者には全く別物という印象はしない。事実、ヴィッケネームは39年版に基づいて論じているし、ドテルは「恩寵」の課を39年版と42年版と比較し、内容的に変更はほとんどないとみている。²⁰⁾ただ、他の小品二点(La petite instruction pour disposer des enfants à recevoir le sacrement de Confirmation et L'Explication des cérémonies de la Messe)が新たに加えてあることは特記しておいてよい。

第三の「第二版が何者かの操作で危うく禁書処分にされかかったこと」は、ほぼ全面的にA.アルノーの言表に従わざるえない。なぜならどの文献もアルノーをベースにしているようであるから。C.ランスロの『サン＝シラン氏の生涯に関する覚え書』Mémoires touchant la vie de Monsieur Saint-Cyran、N.フォンテーヌの『ポール＝ロワイヤル史のための覚え書』Mémoires pour servir à l'histoire de Port-Royal、J.ブゾワーニュ『ポール＝ロワイヤル修道院史』Histoire de l'abbaye de Port-Royalなどに描かれるこの事件はアルノーが語っていることの要約としか思えない。たとえば、C.ランスロは「王(ルイ十三世)が亡くなる前に、イエズス会士たちはサン＝シラン氏に対して新たな迫害を企て動き始めた。彼らは氏の釈放直前、1643年年頭に出版された氏のカテキズムにその口実を求めている。」と切り出す。²¹⁾そして、1月始め以来、彼らは内密にパリ大司教会議で、この皆から賞賛された小さな本に陰謀を企て、ときのパリ大司教J.-F.ド・ゴンディの名で、『平俗神学』が誤った精神を導きうる多数の命題を含むとして、この問答形式の本で教えることを禁じる「教書」Mandementを全教区に差し向けさせたという。

アルノーがこの事件を詳しく論じるのは、1652年に出たという『パリ大司教閣下がポール＝ロワイヤル修道院正当化のため、イエズス会士ブリザシエ神父の本に下した禁書措置に対する擁護』Défense de la censure que Monseigneur l'Archevêque de Paris a faite du livre du Père Brisacier Jésuite, pour justification du Monastère de Port-Royalという文書においてである。²²⁾ブリザシエ神父はガラス神父やアンナ神父と共にこの時代イエズス会を代表する論客のひとりであり、『混迷のジャンセニスム』Jansénisme confonduでポール＝ロワイヤル修道院を中傷しているが、ここでアルノーが問題にしているのは『重要書状』Lettre d'importanceという同じくポール＝ロワイヤルを侮辱的に論じている文書である。アルノーはこの文書に十三箇条にわたり反論を試みており、その最後の擁護文に『平俗神学』の一件が現れる。²³⁾

1643年1月27日付けのパリ大司教「教書」は、大司教会議の一般共通オルドナンス更新に臨み、「同会議が認めるものとは別なカテキズムを教会や学校において教えない」という箇所に大司教の許可なく、『平俗神学』という題の小冊子を教えたり、読んだり、出版したり、記憶したりする

ことの禁止」という文を加えたというものである。

第四の「禁書処分はパリ大司教の力で解かれたこと」は、先のアルノーの文書中に「パリ大司教の教書」のコピーが載っているの、そのまま引用してみよう。

「パリ大司教殿の教書(Mandement de Monseigneur l'Archevêque de Paris)

いとも名高きパリ大司教閣下殿から、パリ市内と市外区の諸教会におけるすべての司祭と助任司祭に対して以下の事柄が厳命される。ある種のカテキズムと“平俗神学”の禁止措置に関する大司教殿から本日送付された教書の公表を延期する。前教書は閣下から全く同意を得ておらず、また今後起こりえる諸理由のため、閣下から別に命令が下るまで、この教書の公表を延期する。

1643年1月末日、パリ大司教I.FRANÇOIS P.署名

大司教全権委任秘書兼書記、ロジェによる」²⁴⁾

以上のように第一教書は公表延期された。この第二の教書は1月末日付なので最初の教書からわずか四日後ということになる。C.ランスロの言明を信用すれば、最初の教書の各教区での公表は2月第一日曜の説教のとき、というからぎりぎり間に合ったことになる。²⁵⁾ 2月6日サン＝シランはヴァンセンヌ城から解放されて、パリ大司教に感謝の念を表し、敵対者たちがこの小著の教義に異議を挿むどんな難問にも答える準備があると彼に宣言したという。また、公表延期となったオールドナンス(教書)は以後完全に取り消され、廃止されたという。この小さな迫害は却って、『平俗神学』の名声を高める皮肉な結果となり、以後13～14版を重ね、よく売れたという。²⁶⁾

一方、イエズス会士たちは矛先をかえて、サン＝シランのミサの説明箇所を批判した。これを説明したC.ランスロは「何人かの友人が問題箇所を変えるよう、サン＝シランに提案したが、彼はそうすべきではないと主張した」という。また、パリ大司教会議から出頭要請があったときも、アンジェリック教母が出頭を勧めたにもかかわらず、彼は「心配しないで下さい。もし神が権力者たる枢機卿の眼前に行くようにして下さいなら、大司教会議の眼前にも行きましょう」と言って、断ったという。²⁷⁾

イエズス会士たちはサン＝シランの死後(1643年10月11日)も標的を変え、ポール＝ロワイヤルの修道女たちに事実無根の誹謗や中傷を撒き散らしたとアルノーはいう。それがブリザシエ神父の『重要書状』であり、アルノーはこの神父の短い言説を引用している。

「そして、彼(ブリザシエ神父)が言うには、この点(『平俗神学』を侮辱したこと)において自分に誤りがあるなら、パリ大司教閣下はサン＝シランの陰謀によるカテキズム全祕儀に含まれている高い信仰心に大きな不正を犯したと言わねばならない。閣下は、信仰において誤りがあり、敬虔心(信仰心)に有害なものとしてこの本を禁書処分とし、この最初の種子が果実を生み出す前に、これらを摘み取り、毒が広がらないようにしたと言うべきである。」²⁸⁾

つまり、ブリザシエ神父はパリ大司教の名を借りて、自己弁明しているのである。アルノーは

このわずかなことばの中に四つの明白な嘘があるという。

- ①信仰の主要な秘儀についての短い説明は陰謀の精神でなされたこと。
- ②それが信仰において誤りがあり、信仰心に有害であるとして禁止されたこと。
- ③パリ大司教がこれを禁止措置にしたこと。
- ④彼はいわゆるこの毒が広がることを許さず、種子が果実をなる前にこれを摘み取ったということ。

事件の発端から十年近く過ぎ去ったこの時期にこうした文書が公表されること自体が驚きであるが、それだけ双方の対立が平行線のまま推移したことが伺える。アルノーのこの文書が公表される一年前、1651年さすがのアンジェリック教母もブリザシエ神父の『混迷のジャンセニスム』に抗議し、大司教に訴えている。²⁹⁾ ポール＝ロワイヤル修道院への誹謗と中傷が余りに酷いということだろうか。少年期を「小さな学校」で過ごしたJ.ラシーヌもこの時期のイエズス会士による修道院への中傷を回想している。³⁰⁾

ポール＝ロワイヤルで使用された『平俗神学』

サン＝シランの死後、「小さな学校」の生徒たちと女子修道院の寄宿生たちに『平俗神学』は教材として使われていた。「小さな学校」では、日曜日に子供たちにカテキズムを教え、サングラン師などがその任にあたっていたことが知られている。³¹⁾ 当時生徒であったT.デュ・フォセは彼の『メモワール』のなかで、『平俗神学』が使われたことに触れ、「カテキズムとして『平俗神学』というタイトルをもつものが我々に使われた。王の許可と博士たちの承認を得て印刷された本です。自分たちの年令で理解できるよう、易しい方法で信仰の主要な点や福音の真理」を説明されたと証言している。³²⁾

修道院女子寄宿生に関しては、J.パスカルの『生徒規則』Règlement pour les enfantsが参照できる。³³⁾ 三才から十八才位までの女子生徒に向けて書かれたこの作品には、当時の女子教育の実情が明確に示されており、ここでも読書教材として『平俗神学』の使用が記されている。「神の恩寵のおかげで、私はサン＝シラン氏のカテキズム(『平俗神学』)を彼女たち(生徒、子供たち)にとくに説明しようと思いました。彼女たちが神と隣人たちのお蔭で生きていることと生活習慣について教育するためです。」³⁴⁾ ジャクリーヌが『生徒規則』を書いたのは1657年であるが、彼女は53年から61年の死ぬときまで、女子生徒たちの教育係を勤めた。³⁵⁾ 彼女はポール＝ロワイヤル修道院に入る前に『平俗神学』をはじめとしたサン＝シランの小品を精読したという姉ジルベルトの証言がある。³⁶⁾ この慣れ親しんだ書物を日曜日の暗唱時間(45分)に使用することは、彼女にとってごく自然なことであっただろう。

『生徒規則』の「教育について」De l'instructionの一部を引用して、ドテルは「一見して、全体像は度はずれのようなものである。だが、そこには充分普遍的なカテキズム的論理が認められる。初年度は信仰や道徳についてカテキズム全体の総合的視野を与え、次年度以後はキリスト教徒としての訓練、ミサ・祈り・告解といった教えでの生活の仕方を中心にしている。結局、サン＝シラ

ンの『平俗神学』に従った説明計画が体系的カテキズムの最終段階を示している」と評している。³⁷⁾

結び

ポール＝ロワイヤルの隠士たちとイエズス会士たちとの論争において、サン＝シランの小品の問題が正面から取り上げられることは余りない。これはどうしても論争の焦点が重要作品の『アウグスティヌス』や『頻繁なる聖体拝領』にいくからである。『平俗神学』が禁書処分にされかかった1643年は、アルノーの『頻繁なる聖体拝領』が出版される年でもあるし、アルノーが『…禁書措置の擁護』を出版した1652年には、『アウグスティヌス』に対するアベールの有名な「五命題」問題がすでに動き出している。そうした背景を考慮すると、この論考で取り上げた『平俗神学』の一件はポール＝ロワイヤル修道院を壊滅に追い込んでいく紛争のプレリュードといえるかも知れない。

なお、この小論は1997年6月日本フランス語フランス文学会春季大会で口頭発表したものをベースに若干の加筆・訂正を行ったものであることを付記したい。

注

- 1) サン＝シランの略歴については、Jean Orcibal, *Saint-Cyran et le jansénisme*, Seuil, 1961.および、飯塚勝久『フランス・ジャンセニズムの精神的的研究』未来社、1984年を主に参照した。
- 2) *Œuvres de Messire Antoine Arnauld ...*, Paris-Lausanne 1775-1783, 43 vol. (reprint: Bruxelles, 1964-1967), tome XXIX, (Préface historique et critique, p.XXVI). Claude Lancelot, *Mémoires touchant la vie de Monsieur de Saint-Cyran*, 2 vol., Slatkine (réimp., Cologne, 1738), 1968, tome 1, p.229. Jérôme Besoigne, *Histoire de l'Abbaye de Port-Royal*, 2 vol. Slatkine (réimp.,Cologne,1752), 1970, tome 3, pp.450-452.
- 3) サント＝ブーヴは M. de Rebours宛としている。(Saint-Beuve, *Port-Royal* par Maxime Leroy, 3 vol., Gallimard, 1953-55, vol.2, p.418.)
- 4) Supplément au Nécrologe de l'Abbaye de Notre-Dame de Port-Royal, Paris, 1735, pp. 46-47 (Geneviève Delassault, *La pensée janséniste en dehors de Pascal*, Buchet/Chastel, 1963, pp.145-147). cf. Nicolas Fontaine, *Mémoires pour servir à l'histoire de Port-Royal*, Slatkine (réimp. Utrecht, 1736), 1970,t.1,XXXI-XXXII.
- 5) N.Fontaine, op.cit.,pp.191-194. cf. Irénée Carré, *Les pédagogues de Port-Royal*, Slatkine (réimp. Paris, 1887), 1971, pp.32-40.
- 6) A.Furetière, *Dictionnaire universel*, 4 vol., Georg Olms Verlag (réimp. Haag, 1727), 1972. また、D.T.C.の《catéchisme》の項では、「洗礼後の子供や無知な大人たちになされるキリスト教真理の口頭による易しい教育であるが、時代を経て、同真理の基礎的教示を含む本に移行...」とある (*Dictionnaire de théologie catholique*, 32 vol., 1899-1963)。
- 7) J.Orcibal, op.cit.,p.180.
- 8) Jean-Claude Dhôtel, *Les origines du catéchisme moderne*, Aubier, 1967, p.9.
- 9) Ibid,pp.265-267.

- 10) Ibid, pp.326-329.
- 11) サン＝シランの『平俗神学』のイデオロギー的評価については、ジャンセニズム研究の権威の一人であるJ.ラポルトも次のように言っている。「要するに、サン＝シランのこの小カテキズム(平俗神学)がどの点で通常のカテキズムと違うのかを説明することはひどく当惑させられるだけである。(…中略…)サン＝シランに関する困難さは、彼の教義がどの範囲において正統カトリシズムから離れるかあるいは近づくかを知ることではなく、どういう観点で彼に一つの教義がありうるかを知ることである。」Jean Laporte, *Les doctrines de Port-Royal I*, P.U.F., 1923, p.17
- 12) Charles Wackenheim, *La catéchèse*, P.U.F., 1983, pp.45-50.
- 13) Saint - Cyran (Jean Duvergier de Hauranne, Abbé de), *Théologie familière avec divers autres petits traités de dévotion*, 2e éd., 1642 (B.N.-D.33401)
cf. *Théologie familière*, 1639 (B.N.-D.33399).
- 14) Jean Orcibal, *La spiritualité de Saint-Cyran* (Les origines du jansénisme: V), Vrin, 1962, pp.149-161.
- 15) A.Arnauld, *Œuvres*, t.XXIX, (Préface historique et critique), pp.XXVI-XXVII. 『アルノー著作集』29巻には、「サン＝シラン氏の弁明」Apologie pour M. l'Abbé de S. Cyranなどが含まれる。
- 16) J.Orcibal, op.cit., pp.139-141.
- 17) A.Arnauld, op.cit., p.XXVI.
- 18) J.Orcibal, op.cit., p.140.
- 19) Frédéric Delforge, *Les petites écoles de Port-Royal*, Cerf, 1985, p.349.
Jean Lesaulnier, «La fréquente communion d'Antoine Arnauld: Genèse d'une œuvre» in *Chronique de Port-Royal*, No.44, 1995, p.71.
- 20) C.Wackenheim, op.cit., p.50. J.-Cl.Dhôtel, op.cit., pp.326-327 (note).
- 21) C.Lancelot, op.cit., p.229.
- 22) A.Arnauld, op.cit., pp.537-595.
- 23) Ibid., pp.588-595.
- 24) Ibid., p.591.
- 25) C.Lancelot, op.cit., p.231. サント＝ブーヴは教書公開の第一日曜日を2月1日と言っている (Saint-Beuve, op.cit., p.662)。
- 26) A.Arnauld, op.cit., p.591.
- 27) C.Lancelot, op.cit., pp.232-233.
- 28) A.Arnauld, op.cit., p.588.
- 29) Louis Cognet, *Jansénisme*, P.U.F., 1961, pp.58-59 (朝倉剛, 倉田清訳『ジャンセニズム』白水社, 1966年, p.65)。
- 30) Racine, *Œuvres complètes II* par Raymond Picard, Gallimard, 1966, pp.63-64
(金光仁三郎訳『ポール＝ロワイヤル略史』審美社, 1989年, pp.41-42)。
- 31) F.Delforge, op.cit., p.30 et p.43. René Taveneaux, *La vie quotidienne des jansénistes*, Hachette, 1973, p.71.
- 32) Pierre Thomas Du Fossé, *Mémoires*, Slatkine (réimp. Rouen, 1876-1879), 1976, tome I, p.98.
- 33) Jacqueline Pascal, «Règlement pour les enfants» in *Les Constitutions du Monastère de Port-Royal du Saint-Sacrement*, Paris, 1721, pp.383-479. cf. Jean Mesnard, *Œuvres complètes de Blaise Pascal III*, Desclée de Brouwer, 1991, pp. 1135-1198.
- 34) J.Pascal, op.cit., p.410. cf. J.Mesnard, op.cit., p.1155. Bernard Chédozeau, «Idéal intellectuel

et vie monastique à Port-Royal 》 in *Chronique de Port-Royal*, No.37, 1988, p.67.

35) F.Delforge, 《Le ministère pédagogique de Jacqueline》 in *Chronique de Port-Royal*, No.31, 1982, pp.107-119.

36) J.Mesnard, *Œuvres complètes* de Blaise Pascal I, Desclée de Brouwer, 1964, pp.663-664.

37) J.-Cl.Dhôtel, op.cit., p.271.